

D.メイナード著『医療現場の会話分析—悪いニュースをどう伝えるか』  
(樫田美雄・岡田光弘訳 勁草書房 2004)

平英美  
滋賀医科大学

Hidemi TAIRA

本書は、2003年に上梓されたダグラス・メイナード (Douglas W. Maynard) の *Bad News, Good News: Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings* の抄訳である。原著の1, 4章はそのまま訳されているが、2, 3, 5, 6の各章は部分訳となっており、7, 8章は割愛されている。原著は、ニュースを伝えるという「出来事」を医療に限定して論じているわけではない。これに対して訳書は、部分訳の各章が医療の事例のみを抜粋しているため、書名通り、「医療現場」の会話分析に焦点を絞った著作に姿を変えている。「訳者解説」で明かされているように、原著者のメイナード氏と相談のうえこのような形に再編集されたとのことである。また、メイナード氏からは、訳書の編集意図に合わせた長文の日本語版序文が寄せられており、医療場面における日米の文化差が論じられている。訳者である樫田美雄氏と岡田光弘氏は、ともに医療現場を対象とする数多くの会話分析研究を積み重ねておられるが、以上のような経緯から、厳しい出版事情のなかで、できるだけ早くこのような良書をわが国に紹介したかったというお二人の熱意と配慮が読むものに伝わってくる。また、類書と異なり、会話断片が英文を併記することなく日本語として自然なやりとりになるように訳出されているのも本書を読みやすくしている。医療現場にはさまざまなコミュニケーションが溢れている。また、近年、それらの医療言説を対象にした研究も活発になっている。それゆえ、これから医療現場を対象とした会話分析に取り組んでみたい、あるいは会話分析の知見を臨床の現場に応用してみたいと願う多くの人々にとって、この領域の第一人者と評されるD.メイナードの著作を手軽に読むことができるようになった意義は何よりも大きい。

読了して印象に残ったのは、メイナードがサービス精神旺盛な人であるという点であった。まず第一に、メイナードは、方法論的に禁欲的であるよりも異種混交に寛容であることを好むタイプの人のように思える。近年、会話分析とエスノメソドロジーを別のものとする考え方もあるが、メイナードは両者を一体のものとして扱う。彼は、比較的初期のガーフィンケルをしばしば引用するのだが、厳格化してきたエスノメソドロジーに依拠して会話分析を批判することはない。さらに、彼は、エスノメソドロジーと近縁関係にある諸理論を一定評価しつつ葉籠に収め、エスノメソドロジーの視点からその限界を指摘するという議論の組み立てをいくつかの章で見せている。したがって、本書を読み終えると、会話分析が医療現場における言説分析に最も適していることがわかるだけでなく、なぜ現象学やナラティブやゴフマン〈のみ〉では駄目なのかが読者には巧まずして納得できる仕組みになっている。例えば、ニュースについて導入的な検討がなされる「1 悪い知らせ、よい知らせと日々の生活」では、シュッツ、フッサール、メルロー＝ポンティらの現象学に言及する。メイナードは、ニュースを聞くという体験についてのナラティブ・データを織り交ぜながら、ニュースという出来事は、良い知らせにせよ悪い知らせにせよ、「社会の

成員にエポケーという状態をもたらす」と主張する。そのエポケーは成員に「基盤喪失」という「意味構成上の危機」をも惹き起こす。エポケーはなにも哲学的思惟を進めるための特別な手続きとしてあるのではなく、人々の生きられた経験としてあるのだ。こうして現象学の検討からは、「日常のカテゴリーと対象を、それらを構成する諸活動に変容しなければならない」という教訓が引き出される。また、「3 会話分析とエスノグラフィー」で、メイナードは、「社会構造と結びつけることで発話の文脈を捉えようとする」類のエスノグラフィー的諸研究を批判する。俎上にのせられるのは相互作用論者のグレイザー&ストラウスや批判的談話分析のヴァン＝ダイクらである。彼らは、教育、階級、職業など社会的な抽象概念と伝達の様式とを相関させる。しかし、メイナードは、具体的な会話データに基づいて、そのような社会的カテゴリーもまた参加者が相互行為を組織化していく際に定式化されるものにすぎないことを論証していく。

もう一つサービス精神を感じることができるのは、会話分析の成果を実際の医療現場に応用することに、メイナードが積極的である点である。訳書では、「4 ニュースを伝えるシーケンス」が、もっとも会話分析の手法のよくわかる章である。ある出来事がニュースであるのかどうかは予め決まっているのではないし、そのニュースがどのような（良い悪いの）「位置価」を持つかも予め決まっているわけではないことは、何度も強調される。ガンの宣告だからといっていつも悪いニュースであるとは限らない。そうであるとすれば、あくまでも参加者たちが当該の会話において悪いニュースを伝えるシーケンスとして組織化しているからである。しかし、ニュースを伝える際に生じる特徴的な会話シーケンスを文字通りターン・バイ・ターンで分析すればするほど、いかにガン告知に臨めばよいのかについてより確実な処方箋を得ることができるかもしれないという誘惑は強くなる。メイナードは、そのような期待に応えるかのように、「エピローグ」において、「悪いニュースや良いニュースを送り届けるための手順」を7点に、「良いニュース、悪いニュースを伝える心覚え」を4点に要約して示している。医療者は、このような手順や心覚えに従うことで患者に上手くインフォームドできるかもしれないし、反対に、患者は今どのようなニュースがもたらされようとしているのかをいち早く察知できるかもしれない。しかも、「偶有性が時々そのようなプロトコルの不適切さを引き出すとしても、プロトコルが無効であるということにはならない」という彼の言葉どおりだとすれば、これらの教訓は個々の文脈を越えた「一般的で抽象的な」性質を帯びていると見なされやすい。ただし、読者は、エピローグに説かれている教訓を、近年大量に出版されている医療者のためのコミュニケーション改善を目的とするハウ・ツー本と内容的にさして変わらない凡庸な教えであると感じてしまうのではないだろうか。しかし、だからといって会話分析に見切りをつけるのは少し早計である。エピローグは会話分析をやんわりとであるが韜晦していると受け取るほうがよいからだ。言うまでもなく、実際の会話データを分析している点で本書とハウ・ツー本とは決定的に異なっている。本書のいたる処でメイナードが述べるように、会話分析の真骨頂は具体的な会話を子細に分析することにあるし、ガーフィンケルの用語を借りるならば出来事の「ユニークさ」を記述するためにこそ会話分析はなされなければならないのだ。その意味で、本書を読むうえで、改めて第4章で行われている細かな分析の跡を辿ることが会話分析を理解する最も早い道であることを付け加えておきたい。